

「プライド(pride)」＝「誇り」ではありません

国府小学校長 桐谷 一夫

4月6日の朝、1学年ずつ進級した子どもたちと、5名の転入生、そして新しい先生を迎え、国府小学校の平成29年度がスタートしました。3年生（2名の転入があり3学級編成になりました）と5年生はクラス替えの表が貼り出され、特にドキドキしているようです。春の訪れと新しい出会いが重なる新学期の空気はすがすがしいです。そして、午後からは新1年生の入学式が行われました。どの子ども、期待と緊張とが入り交じった良い顔をしています。

スタートの日、とても嬉しいことがありました。朝から登校した在校生も転入生も、午後からの入学式に参加した新入生も含め、全校児童436名が全員出席できたことです。春休みの期間、子どもたちも含めて各家庭が、大きな事故や事件にまきこまれることなく無事に過ごせた証だからです。新聞に掲載される悲しい報道を見るにつけ、全員出席は決してあたりまえのことではないのだと実感します。



入学式。6年生が1年生の手を引いて
入場。「誇りづくり」のスタートです。

さて、前日の5日には、最高学年となる新6年生が登校して、新年度を迎える準備をしてくれました。各教室の机を数えて移動したり、新入生の教科書を運んだり、入学式会場となる体育館や廊下の飾り付けをしたり椅子を並べたり、めまぐるしく働いてくれました。その動きを支えた原動力の一つに、「最高学年になったのだという誇り」があるのだと思います。「誇り」は、自分を行動させるための意欲や主体性につながる大切なものです。これから多くの経験を積み上げ、学び成長していかねばならない子どもたちにとっては、特に重要です。ここでは、「誇り」についての思いを記させていただきます。

片仮名に直された英語が氾濫する現代では、「プライド (pride) = 誇り」だと誤解している人も多いでしょう。しかし、よく似た言葉ではあっても「プライド=誇り」ではありません。「プライド」は、もともと英国の騎士道精神に由来する言葉であり、ほとんど個に限定して使われます。「自尊心・自慢・矜持・気位……」と日本語訳されることもあります。人間は本来弱い動物なので、不安を解消するために持ってしまう感情がプライドなのかもしれません。だから自分が反発したい時や思い通りにいかない時、すなわち「自分を変えたくない時」に、「私のプライドが許さない」などと使われることになります。

一方の「誇り」は、もともとは自己の所属集団への自慢の気持ちに由来します。所属集団を「誇り」とし、その一員としての自分を誇る気持ちなのです。だから「国府小学校を誇りに思う」とは言えますが「国府小学校をプライドに思う」とは言えないのです。「誇りづくり」の過程では、集団の質を高めるために、周りの意見を聞ける謙虚さが必要です。また、個人的に間違いを犯したら、すぐに頭を下げて謝り改めていく姿勢も必要です。これは高いプライドを持っていたら逆にできないことなのです。

集団の中で個を育てる学校という場においては、根拠の無い「プライド」は捨て、努力や事実に基づいた「誇り」を育てることこそが大切だと思います。「学級への誇り→学校への誇り→国府町への誇り→高山市への誇り→そして日本への誇り……」と、その所属する世界への意識を広げながら、その世界を構成し高める一員として自己を成長させていってほしいと願うのです。

本年度も国府小学校は、児童と職員が力を合わせ、「誇りを築き、絆を深める学校」を合い言葉に、子どもの姿が地域の「誇り」となる学校をめざしていきます。よろしくお願いたします。